

磨り硝子のプリズム。

斜光が黒猫のイプシーの背中に零れる。

白の似合う朝。

私は、素敵な旦那様を待ちながら朝食を作ります。

繰り返しても飽きない時間。

白い皿に似合う玉子焼き。

食事の準備が出来るとコウタさんが起きて来ました。おはよう、と微笑んで眠たそうに閉じた片目をこすって、イプシーがコウタさんの足下にすり寄ると、足を動かして挨拶。

繰り返しても飽きない素敵な朝。微笑みが似合う朝。

「今日はね、ちょっと遅くなるかもしれない」

「何時なの？」

「そうだね……、十時ぐらいかな」

「あら、いつも通りじゃない」

「……うん、そうだね。でも昨日と比べたら一時間遅いよ」

「寂しいです」

「うん。…善処するよ」

「期待して、待っています」

「ありがとう、リサ」

とても物静かで穏和な微笑みが素敵な旦那様。

二人で暮らし始めたのが三年前。ずっと前から付き合っていました。コウタさんには奥様がおられました。奥様は、三年前に不慮の事故でお亡くなりになりました。

コウタさんは、それでも私の前では泣いてはくれませんでした。とても気丈な方です。そして今でも奥様の事を愛しておられます。リビングの隅には、私との写真と一緒に、奥様の写真も飾ってあるのです。私は、それが少し嫌です。けど、コウタさんの誠実な愛はとても好きです。

朝食を終えて、コーヒーを飲みながら少しだけお話をしました。コウタさんはテレビや新聞は見ません。嘘が多くて嫌いなのです。だから、コウタさんが出かけるまでの数分、とても静かで、コーヒーの似合う時間。

玄関前で、コウタさんが何か言いかけてました。

彼はいつも出かける前に言い残したことがないかと自問します。

でも、結局はなにも言わないのです。

「いつてくる。ひとりで大丈夫だね」

子供を心配するようにコウタさんは言います。

「はい大丈夫です。いつてらっしゃい」

わたしは微笑み、彼の頬にキスをしました。

大丈夫です。

だって、わたしは子供でもなければ、一人でもないのだから。

食器を洗って、洗濯をして、掃除をして。合理的と思える順番と気まぐれな変化

で家事をこなしていきます。そして、紅茶を入れて時計を眺めながら、わたしは待ちます。

十時を知らせる時計『エリーゼのため』が聞こえてくると

調子に合わせるように、チャイムが鳴りました。

わたしはドキドキしています。

急いで、でも走らずに玄関に向かって、ドアを開けて

「いらっしやい」微笑むと彼は困った表情を見せていました。

「……ごめんなさい」

「いいのよ。さ、入って」

彼の手を取って、招き入れました。

紅潮した頬、照れくさそうに彼は頷きました。

まだ子供です。

とても恥ずかしがり屋で、大人しくて、優しい子供。

秘密のお友達。

外に出られない私に、奇蹟のように現れた少年。

わたしは顔を閉じて、微笑みました。

そして彼はヴァイオリンを弾いてくれました。

わたしだけに……。わたしのために時間を消費して……。わたしを想って……。

弦と弓。

違うものだから生まれる摩擦。

摩擦があるから生まれるものもある。

摩擦がないとわたしたちは立つことも出来ない。

いえ……立ち尽くすことしか出来ない。

どこにも歩いていけない。

閉じこめられ、檻の中に。

わたしは外に出られません。

でも、招き入れることはできません。
彼がヴァイオリンを弾く。
撫でるような弓。

寡黙な彼の口は、純粹な音になってわたしに話しかけてくる。
おだやけで、壮大な、情景。

頬にあたる斜光が、まるで野花の香りを運ぶ風のように。
ヴァイオリンソナタ・春

睡魔も眠ります、ゆるやかな響き。
響いて、散って、朽ちて、落ちて、底に残る。

わたしはそれを拾って胸に抱きしめました。
時計の音色も忘れ、記憶を忘れ、わたしも忘れ、生きている事を忘れて、彼に甘えて、落ちていく。
その落下が、とても、心地よかった。

夕暮れが終わりの言葉。

彼とお話をしました。食事もしました。お茶も飲みました。音楽を聴きました。

一緒に、少し、お昼寝もしました。
靴を履いて玄関のドアを開ける前に、彼は振り返ってわたしを見ました。

「また：明日、来てもいい？」

怯えるように、伏し目がちに彼はわたしに尋ねました。

わたしをしゃがんで、彼の手を握りました。

「ええ。…またいらっしやい」

微笑み見せて、彼は帰っていきました。

ドアが開いて見える、わたしが行けないどこかへ。

コウタさんはわたしが眠ってしまった後に帰ってきました。

十時まで起きていました。けど、コウタさんは帰ってきませんでした。

その日は、零時近くまで研究室に残っていた事を聞いたのは翌朝です。

コウタさんは大学の理工学部で助手をしています。どんな研究をされているのか、わたしには分かりません。わたしには遠い世界で、コウタさんは働いています。毎日、遅くまで勉強しています。

ですが、朝はちゃんと起きて朝食を食べて二人で話す時間を作ってくれる優しい旦那様です。

でも、すこし、遠い。

繰り返す日常。

同じ様な作業を繰り返して、同じように考える。

初めは不条理だと思っただけ、いつのまにかそれが普通と思ひこみ、周囲との認識の差を無くそうと単純化していく。小さな歪みに気付かず、鈍感になって安心する。自分の感覚を、外の平均概念と同じと誤魔化して安定させていく。何も起らない。何も変わらない。何も違わない。平凡だと笑って、繰り返す。魔法の呪文を唱えるように繰り返す。

今は魔法の時代。

それが怖かった。

それが続くことが怖かった。

でも、崩れることはもつと怖かった。

気付いてしまえば、もう、戻れないと思っただ。

白いものに、異色を加えれば、もう白へ戻れない。

綺麗な色でも、いくつも重ねれば、虚しい黒になる。

わたしが思う悲しみは、きつとその黒なんだと知った
知ってしまったから、怖かった。

純白の奇蹟と、純白であり続ける儚さ。

漆黒の深さと、漆黒になる孤高さ。

重ねる内に、気付く事を忘れて、社会に染まっていく。

人が作った社会色に、憧れた純白が染まっていく。

もう、どこにも、のこっていないのかもしれない、と嘆く。

それをとりもどす魔法を知らない。

平々凡々

ハイハイボンボン

ハイハイボンボン

呪文を繰り返して唱える。

誰が教えてくれたか知らない魔法を唱える。

魔法使いはどこにもいない、だけど呪文を唱える。

魔法ができあがっている。だから繰り返して唱える。

だれが作った魔法かしらないまま、繰り返して唱える。

そんな疑問さえ沈まず呪文を毎日唱える。

それが現代の日常なのかもしれない。

愛すべき中庸。

愛されたい天の邪鬼は、どこにいるかご存じですか？

亡くなった妻の命日の翌朝。コウタは一週間アメリカへ出張した。その話をコウタは初め、断ろうとした。

「大丈夫です。わたしは一人でも、待てられます」

リサはそう言うので、コウタはアメリカに行った。

リサは家事を黙々と消化した。

昼前に、玄関に出て、ドアを開ける。

「いらっしやい」

そして、ヴァイオリンの音色を聴く。

いつもの毎日。

秘密の時間。

リサはソファに眠るように深く座って目を閉じる。

となりで睡魔が囁きかけても、彼女には聞こえない。

外に出たいと思った事はなんだかあった。

けど、外に憧れはなかった。

幸せだとリサは思った。

愛されているとリサは感じていた。

たとえコウタが亡くなった妻を愛しつづけたとしても、リサはコウタを愛している。それは間違いないと思った。

ランプの似合う夜。リサはリビングでメールを打った。

コウタに宛てた手紙。

大好きなあなた。

今日はとても素敵なお知らせがありました。

イプシーがひとり階段をのぼれるようになったのです。

ゆっくりで何度も落ちそうになって、わたしはドキドキでした。

明日、二階にもイプシーのトイレを作ります。

でもね、まだひとりでおられないの。

わたしはイプシーを抱っこして降りないとだめなのです。

ちよつと体重が増えたみたいです。わたしじゃなくて、イプシーがですよ。

だから大変。なのにイプシーはまたすぐに階段をあがっていくものだから、わたしで遊んでるのだと思います。

今夜はとても静かです。とても寂しいです。

今、ビゼーのカルメンを聴いています。あなたがヴァイオリンで弾いてくれた曲

です。帰ってきたら、あなたのヴァイオリンが聴きたいです。

早く帰ってきてください。

リサ

部屋のライトを消して私はベッドに入りました。

目を閉じて、ゆっくり呼吸をします。

寝ようと思っても、彼の事を考えてしまいます。

心配です。

風の音が聞こえます。

庭の木の葉を弦に、風が何かを弾いているようです。

外は寒いのかしら。

こつん、硝子に鳴る。

しばらくしてまたこつん、窓硝子に何か当たりました。

ベッドから出て、窓に近づいてカーテンを開けました。

誰かしら、と思うよりまえにきくと彼だと確信しました。

窓を開けて下を見ると、彼がいました。

わたしは手を振って、人差し指を唇に当てました。

静かに、と彼にたいしてのジェスチャーです。

窓を閉めて、わたしは急いで玄関に行きました。

そしてドアをあけると、彼が立っていました。

彼は私に抱きついてきました。

私は彼を抱き寄せました。

無言で。それが約束のように。

リサは僕と同じ背丈だ。

僕の手を握って、リビングにつれてくると、ソファに座るように言った。

外は寒かったでしょう、と紅茶を出してくれた。口をつけると、熱かった。

「夜に来たらだめって言ったでしょ」

リサは優しく言った。

「会いたかったから。……ごめんなさい」

小さな細い溜息について

リサは優しく僕の頭を撫でてくれた。

僕は下を向いて、紅茶を飲んだ。まだ、熱い。

「今からだと帰れないわね……」

僕は頷いた。

「仕方がないわね……」

リサはソファから立ち上がって、しゃがんで、下から僕を見た。

「今夜は、一緒に寝ましょうか」

リサは優しい眼差しで、僕に言った。

僕は頷いた。

僕をベッドに座らすと、リサは僕の両手を握った。

「今夜だけだからね。もう二度と夜に来たらダメよ。……もう子供じゃないのだから、いいわね」

困ったような眼差し。

僕はもう子供じゃないのだろうか…。

「もしあの人に知られたらどうなるかしら……。きつと呆れるでしょうね。愛想つかされるかもしれないわね……」

リサは下を向いて呟いた。

本当に愛想尽かされてしまうの？

本当に今、愛されているの？

「あなたも、ただじゃすまないわよ。殺されるかもね、わたしと一緒に……」

おどけた表情で、僕を怖がらそうとする。

リスクが無いなんて初めから思っていない。

僕は生まれた時から、代償は払い続けている。死ぬまで払い続ける。みんなそうだよ。代償を払うために生きているみたいで嫌だよ。だから、生まれてきたと、泣いていたのだよね。生まれなくなったら……。

彼をベッドに寝かせて、わたしはリビングに戻りました。

ティーカップを流しに置いて、水を飲みました。

ライトを消して寝室に戻ろうとして、可愛い棚の上に置いてある写真立てを一つ、

手に取りました。

わたしとコウタさんの写真と一緒に、彼女の写真が一枚あります。

わたしはそれを手にとりました。

コウタさんの前の奥様。名前はユリカさん。何度もお会いした事があります。とても綺麗で、知的な微笑みを絶やさない優しい方でした。理想的な、完璧な女性でした。ユリカさんと一緒にいるときのコウタさんは幸せそうでした。大きく表情を変える方ですが、コウタさんは楽しそうで心地よさそうに微笑んでいました。小気味の悪いテンポで会話が弾んで、互いの差異を許容しあって互いの意志を尊重し合っていて、愛し合っていました。今でも、ときどきコウタさんはユリカさんの写真を見ています。悲しそうな顔で、でも、暖かい眼差しで微笑んでいます。わたしはそれが嫌でした。ユリカさんが亡くなられた時、一瞬、ほんの一瞬、嬉しかった……。コウタさんはわたしだけを愛してくれる、と嬉しかったのです。

嫌な女です……。

そんな女をコウタさんは愛してくださいました。けど、コウタさんの暖かい眼差しは、わたしより前に、ユリカさんに向けられているのを私は知っています。わたしはユリカさんとは違う。ユリカさんみたいな完璧な女性ではありません。わたしなんかユリカさんの足下……影にすら届かない。そして、今もユリカさんの影に負けている……。

最近、コウタさんがわたしをじっと見つめます。愛情の眼差しとは違う、試験体を観察する研究者の眼差しで私を見ます。きつと、わたしにユリカさんの共通点を探しているのでしょうか。

ユリカさんの面影が、どこかに落ちていないか探しているのでしょうか。

4

探していた口紅を見つけました。イプシーが隠していました。本当に悪戯っ子で困ります。

少しいつもより楽しい朝食。

なんでわたしは楽しいなんて思っているのでしょうか。

探していた口紅が見つかったから？

久しぶりにテレビを見ながら食事をしたから？

昨日よりもコウタさんが帰ってくる時間が短くなったから？

それとも、彼がいるからでしょうか……。

僕は彼女の為にヴァイオリンを弾いた。

彼女は眠るように瞼を閉じて聴いてくれる。

いつものように、彼女のための演奏会。

僕は上手くないけど、弦は僕以上に感情を伝えてくれる。

決められた言葉を集めて自分の気持ちに近い文章を作るより、何代も伝え続けられた形と意志の旋律に少しづつ僕の気持ちを分けて弾く方が好きだ。正確に伝達されなければ疎通手段として下手かもしれないけど、彼女はそれを拾い集めて言葉にしてくれる。間違えなんてない。必ず伝わる。必ず僕は恋に落ちる。

ヴァイオリンソナタ・春

僕はそれしか弾けない。それだけが彼女に聴いてもらい曲。彼女はもう忘れていくかも知れない春の情景を波にして、青春の喜びと悲哀を包む新緑の風を、伝えた

昼が過ぎ、睡魔も過ぎて、落日。

彼はヴァイオリンをケースに戻して、立ち尽くしてしまいました。

手のやり場が定まらず、前でくんだり後ろにまわしたり目を擦ったりしています。わたしはちよつと黙って、それを見ていました。すると不安げな表情で彼はわたしを見ました。

「僕……帰りたくないよ……」

彼はわたしにお願いしました。

「だめよ。今日は帰るって約束でしょ」

わたしも一人になるのは寂しいけど、約束だから。

「お願い……帰りたくないよ……」

今にも泣きそうな声で彼はわたしに言いました。

怯えるように畏縮して、足下をじつと見つめています。

「今のお家がそんなに嫌い？」

彼は頷きました。

「だって、僕一人しかないから……。誰も、いないから……」

「でも、だからっていつまでもここには居るわけにもいかないでしょ」

「お願い……。お父さんが帰ってくるまで、一緒にいて」

床に雫が落ちたのを見ました彼は泣いているのです。両膝をついて、縋るようにわたしに寄ってきました。

顔を上げると、彼はやっぱり泣いています。

「お父さんが帰ってくるまで一緒に居させて」

わたしは彼を抱き寄せました。

彼はわたしの胸で泣きました。

わたしは彼の頭にそつと手を添えました。

もうなにも言わず。それが約束のよう。

それが、わたしの返事です、と。

彼はコウタさんと前の奥様の息子さんなのです。

彼はコウタさんを恐れています。とても怖がっています。

理由は教えてくれません。

わたしがこの家に入ったと同時に、彼は家から出て行ってしまいました。

理由は教えてくれません。

それでも彼は、コウタさんが居ない時に家にやってきます。

理由は教えてくれません。

そして夕方になると帰ってしまいます。

理由は絶対にコウタさんに会いたくないからです。

わたしの前でコウタさんは彼の事を話しません。わたしもコウタさんに彼の事は話しません。

それは約束だから……。

わたしはコウタさんを愛しています。

その息子の彼も愛しています。

ホントの息子とは同じように……いえ、違う愛情を持っています。

そして彼はわたしを愛してくれず。

でも、コウタさんは嫌いなのです。

理由を聞きたいとわたしは思いません。

知ってしまったてはいけないと思っただけです。

知ってしまったと魔法が解けてしまう気がするので。

たとえ、この生活が外の平均概念からずれた歪なものだとしても、幸せだと思っ

ているから、続けていたいと思うから、わたしは知ろうとしません。

だから、鈍感になる魔法の呪文を唱えるのです。

繰り返し、繰り返し、呪文を唱えます。

5

僕は帰らなかつた。

僕は彼女と一緒にこの家に居た。

繰り返し、繰り返し、一緒に時間を消費した。

彼女は毎晩、メールを書いていた。

誰に送るのか分かつていた。僕は黙って彼女を見せていた。

大好きなあなたへ。

わたしは今、サンタクロースを待っている様な気分です。

明日、あなたが帰ってくるからですよ。

すこしでも早くあなたに会いたいです。

でも、わたしは待っています。

あなたの帰りを、この家で待っています。

ひとりでも大丈夫、と言いますが、

やっぱり一人で居続けるのはとても辛いです。

寂しいからではありません。

あなたがいないからです。

早く帰ってきてください。
わたしは待っています。
わたしは変わらず待っています。

リサ

返事はありません。
でも読んでいただいていると思います。

リビングのライトを消して、寝室に戻りました。
ベッドの端では、彼が眠っています。
身を守るように丸まって、穏やかに眠っています。
そっと彼の頬に手を添えました。

白い肌。まるで死んでしまっているような静かな眠り。
わたしは彼を起こさないように、そっとベッドに入りました。
瞼を閉じると、彼と彼の事を考えてしまいます。

いつもなら、そうなのですが、今夜は真っ暗です。
誰の顔も浮かびません。

でも、音楽だけが聞こえます。
彼がいつも弾いてくれるヴァイオリンソナタ・春。
そしてコウタさんが弾いてくれたカルメン。
感情的に嬉々として悲哀を奏でる彼と

緻密な空しさを綴りながら歓喜を奏でるコウタさん。
わたしはどちらも大好きです。
けど決して重ならない代わらない弓。

わたしは彼の春を再生させながら、徐々に音量を下げて眠りにつきます。

6

電話がありました。

コウタさんからです。

日本に戻った。もう直ぐ家に着くよ、と簡潔な内容でした。

でも私は飛び跳ねてしまいそうな程嬉しくて、ドキドキしています。
時計を見ると午後九時を回っていました。

その日、小さな彼は帰りませんでした。

いつものようにヴァイオリンを弾いて、お喋りして、お茶を飲んで、夕方になりました。けど彼は帰りませんでした。コウタさんが怖がっているのに、彼は頑なに帰ろうとしませんでした。わたしの側に居ると言っていて聞きませんでした。理由は教えてくれませんでした。

チャイムがなって、わたしの感情は爆ぜました。でも淑やかに装って、玄関を開けました。

「やあ、ただいまリサ」

口元をわずかに動かしてコウタさんは言いました。

「おかえりなさい、コウタさん」

わたし緊張しているのでしょうか、言いたい事が沢山あるのに、上手く言葉が発音できません。

「なにか変わった事はあったかな」

ドアをしめて、振り返りながらコウタさんが訊きました。

「いいえ…」上目遣いで、わたしは両手を胸の前で握りました。

「とても、待ち遠しかったです」

「そうか。それは良かった」

「はい、あなたが帰ってきてくださって、とても良かったです」

わたしは背伸びをして、キスをしました。もう何も見えません。

ぼくは二階から二人を見ていた。

わたしは幸せです。

ぼくだけが気付いているだろう。

コウタさんに愛されています。

アイツは誰も愛していない。

わたしはコウタさんを愛しています。

ぼくは教えてあげたい。

これがわたしの幸せです。

いっそ粉々に壊してやりたいと思った。

コウタさんさえいればわたしは外に出なくても。

アイツは愛を知らない。

いつまでもこの家でわたしは待っていられる。

馬鹿な女だ。

ああ、もうなにも愛されているのね私…

僕は寝室に戻って隠れておくことにした。

コウタさんはお酒を飲みません。いつも食事を終えたら少し話しをして書斎に戻

るのですが、今夜はお疲れのようです。書齋で難しい本を読んで、深夜に寝るのに、今夜は食事を終えるとお風呂にはいってリビングに戻ってきたのです。ちよっと、驚きました。書齋に行かれなかった事ではなくて、冷蔵庫からワインを取り出した事です。

「なにか良いことでもあったのですか。たとえば、出世されたとか」

「いや、教授にはまだ幸いになってないよ」

「え……コウタさん、助手でしたよね」

「いや、残念ながら助教だよ」

「いつ助教になられたの？」

「そうだね……半年ぐらい前かな」

「うそ……わたし知りませんでした」

「うん、あまり自慢できないから内緒にしていたんだ」

コウタさんはグラスに赤いワインを注いで、少しずつ飲みました。

「それと、良いことがなくてもワインは飲めるし笑っていられる。それが人間なんだよ」

今夜のコウタさんは機嫌が良いようです。

一度に口に入れる量は少ないのですが、何度も何度もグラスを傾けて飲むので、十分ぐらい経つとコウタさんの頬はちよっと赤くなっています。

「そうだ……」

突然、コウタさんは何かを思い出したようで、席から立ちました。そして小さな棚に収めてあるヴァイオリンケースを取り出しました。パチパチ、留め金を外してヴァイオリンと弓を手にとって間近で眺めました。

わたしはどきっとしました。

なぜなら、そのヴァイオリンは彼が毎日弾いているものだからです。

元はコウタさんの物ののですが、彼はめったに弾かないので借りていました。コウタさんは実験器具の点検をするようにヴァイオリンを見えています。

「おかしいな、一年近く使っていないのに手入れが行き届いている……」

わたしはどきっとしました。

わたしは何か良い言い訳がないか考える繕える前に、彼に近づいて行きました。

「そうか……。リサが弾いていたんだね」

彼は微笑みました。

「え、あ、……ごめんなさい。勝手な事をして……」

「構わないよ。いや、ありがとう。ちゃんと手入れしてくれて嬉しいよ」

彼は微笑みました。とても知的な、小さな笑み。

そしてヴァイオリンと弓を構えて、姿勢を正しました。

目を細め、酒気を払うように深呼吸をして、瞼を閉じました。

重たい音。

なのに、愉快なりズム
誘惑するような音色。

縦横無尽にさえとらわれない奔放な恋。

情熱的な歌声を

軽い冷風のように弾いて

わたしを撫でては飛び去ってしまう。

ビゼー、カルメン。

今夜のカルメンは、どこか、曖昧。

昨日まで形があったと思っていた物が、

本当は、どこにも無いものだと言うような曖昧さ。

時間と空間の摩擦で朽ち散ってしまいそうな儚さ。

気持ち悪い。

目を開けて、コウタさんをみた。

目を開けて、コウタさんはわたしを見ていない。

気持ち悪い。

わたしが居る方を向いているのに、

眼差しはわたしには向けられていない。

視界にはわたしが入っているはずなのに、

コウタさんの思いの中にわたしは居ない。

ねえ、誰を見ているの？

その情熱は誰のため……

誰を誘惑しているの……

誰を撫でているの……

誰を……愛しているの。

誰を……愛しているの。

ちらり、とコウタさんが視線を移した。

一枚の写真。

沢山ある写真立て。

その中にある一枚の写真。

一瞬だけ微笑んだ。

写真を見つめ、微笑んだ。

愛おしむ眼差し。

わたしじゃない。

わたしじゃない。

その眼差しはわたしに向けない。

たった一枚の写真。

ユリカさん…。

コウタさんは、ユリカさんを愛してる

そんなの、知っている。そんなの、分かっている分かってるわよ。

それでもコウタさんはわたしも愛しているから、わたしは良かった。良かったのよ。コウタさんの一途な愛も好きだったのよ。

でも、今は一人。

彼の愛はわたしにはない。

コウタさんにはユリカさんしか見えない。

わたしはなにも見えない。

視線を戻しても、コウタさんはわたしなんて見ていません。

わたしを視界に納めても、きつと、ユリカさんを見ている。

ときどきコウタさんは口にした。

わたしは、ユリカさんにどこか似ている、と。

どこが似ているか教えてくれなかった。

彼も分らないって言っていた。

微笑んで言っていた。

嘘偽り無く愛しているって言っていた。

わたしを見て言ってくれた。

言ってくれたのに、コウタさんはわたしのどこかにユリカさんを見ている。

わたしは違う。ユリカさんじゃない。

「……やめて。…」

死んだ人間に生きている私は劣っている。

塗りつぶされている。

影に立ちふさがっている。

ユリカさんの面影にも、わたしは劣っている。

まだユリカさんはわたしの邪魔をする。

気持ち悪い。

苛立たせてわたしを困らせる。

「やめて……もう、やめて……」

ユリカさんは死んだの。

もういないの。

なのに、なんで、わたしの前に立つのよ

わたしの邪魔をするの。

なんでわたしじゃないの。

あなたの愛はなんでわたしに向けてくれないの。

どうして、ユリカさんなの。

わたしは、あなたを愛しているのに……。

「やめて！もうやめて！」

「リサ……」

「愛している！わたし、コウタさんを愛している！愛しているのよ！」

愛している。

コウタさんを愛している。

声が枯れるほど叫んだ。

愛しているって叫んだ。

「リサ……。ぼくはリサも愛しているよ」

「うそ！うそよ！コウタさん、ユリカさんしか見てないじゃない！わたしをじゃなく

てユリカさんを見ているのよ！わたしはユリカさんのスペアなんですよ！劣悪品

なんですよ！だから愛してないですよ！

初めから私を 愛してなかったのよ

7

僕は黙って、彼女を支えた。

泣き崩れる彼女を支えた。

アイツはソファに座って頭を抱えている。僕に気付いてない。中々無様だ。

僕は彼女の頬に触れた。涙を拭き取って、軌跡を舐めた。

彼女の震えたのが分かった。

彼女はゆっくり立ち上がった、ふらつきながらリビングを出た。

僕も黙って彼女の後を追ってリビングを出た。

その間際、ソファで俯いているアイツを見た。

悩んでいる、いい気味だと思った。

僕はアイツが嫌いだ。

それに反比例して彼女が好きだ。

彼女は手摺りに縋りながら階段を上がった。

幽霊みたいだ、いや、幽霊なんてみたことない、イカカタコに近いと思った。

彼女は寝室に入った。

僕も少し遅れ、寝室に入った

暗闇の中、僕は小さな灯りを見た。

目を擦って視界を調整すると彼女がいた。

僕はじっと彼女をみていた。

卓上スタンドの明かりの中、彼女はなにか探している。

引き出しを開けて本を取り出した。

分厚い本。大きな本。それは書物ではなくて、アルバムだと直ぐに気付かなかつた。彼女はアルバムをめくっている。そして、途中で手を止め、カバーをはがして写真を抜き取っている。何枚も抜き取っている。

物音を立てないように気を遣いながら、けど、抜き取った写真を乱暴に千切って、灰皿に捨てている

彼女は机の上に千切られた写真が入っている灰皿を三つ置いた。

そして、ライターで火をつけた。

赤い炎と青い炎。

小さな炎が広がって、

結ばれて、

燃えて燃えても大きくなる。

黒い煙が嫉妬する。

緑の炎がのぞき込む。

スタンドの灯火より情熱的で冷淡な炎。

彼女は髪を払った。

すこし横を向いた。

笑っていた。

悔しそうに笑っていた。

負けた相手を睨んで笑っていた。

涙が蒸発しても、笑っていた。

僕はそっと彼女の後ろに立った。

彼女は顔を隠すように俯いた。

「なんで泣いているの」

僕は訊いた。

「子供にはわからないわよ」

彼女の声は濁っていた。

僕は子供なのだろうか…。

「リサは大人なの？」

「…そうよ、だから気付かなかったの」

「何に気付いたの？」

「わたし……コウタさんに愛されない……ちっとも愛されないの……」

炎がだんだん小さくなっていく。

「コウタさんは、ずっとユリカさんだけを愛していたのよ。わたしにユリカさんを

重ねていただけ……わたしにユリカさんの面影を嵌めようとしていただけなの……。

彼の眼差しに愛情なんてなかった……それに、わたし、愛されているなんて勘違い

していた……ずっと……少し考えれば分かるはずなのに……ずっと、愛されてい

るって思い込んでいたのよ！」

彼女は声を荒げた。

白い服を千切れてしまえば、髪を乱れるほど握りつって、髪を乱れるほど頭を振って、倒れ

てしまえば、その身を揺すって泣いていた。

僕は彼女の肩に手を添えた。

「でも……誰だってそれが愛だって思いこんで誰かを愛しているものだよ」

僕は落ち着いて言う。

彼女は僕の手を払いのけて振り返った。

「子供のあなたに何が分かるのよ！」

僕の間を見た。僕は彼女を見た。

約束だったように、視線を交わした。

「僕は大人じゃないから、知っているよ」

大人が思い出せない呪文を。

君が萎んだ視界の外が見えるんだ。

君が失ったと思っているものは、まだあるよ。

形がないものだから、見失っているだけんだ。

ほら、落ち着いて……そう、ゆっくり呼吸をして……

「リサがなんで愛されたいか知っているよ……」

彼女の肩を優しく掴む。

彼女が顔を上げるのを待つ。

僕は彼女の顔が見たい。

泣いてもいいよ。

怒ってもかまわない。

冷たい眼差しなら受け止めてあげる。

できれば微笑んでほしい。

悲しいなら笑うことはないよ。

嬉しいのに泣いているのも素敵だね。

感情を見せてくれなくてもいいよ。

そのまま隠しているのも可憐だよ。

言葉が出ないなら、そのまま……。

ただ、君を見せてほしい。

できれば、君を抱きしめたい。

そっと触れるように

黙って君を抱きしめる。

それが約束だったように抱きしめた。

「僕は、リサのこと愛している」

「でも……コウタさんは私を愛してない」

「愛されたいの？」

「…はい。…」

「なんで？」

「コウタさんを愛しているから……」

「だから自分も愛して欲しいの？」

「分からない……」

「愛しているだけじゃ不満？」

「……どうしたらいいの？」

「リサの問題だよ」

「……冷たいのね」

「好きにしたらいいよ」

「わからないわよ……わたし、どうしたいのか、……」

「愛が大切？」

「わたしには必要……」

「愛が救いになるの？」

「すがってなにか悪いの？」

「愛がないと生きていけないの、リサ……」

「おねがい、愛してると言って、もう一度……」

「生きていきたいの？」

「ねえ、愛してると言って……」

「なのになんでそんなに悩んでるの？」

「おねがい……わたしを、助けて《愛して》……」

「生きる事なんて体にまかせて、リサは自由になればいい……」

「だったら、あなたがわたしを……自由に……」

「ムリだよ。だってリサを縛っているのは、大人の思いこみ《魔法》なんだから。リサ、……僕を愛してる？」

「ええ……愛してるわよ。だからあなたも私を、愛して……」

「うん。でもリサの愛って、ママゴトだね」

僕は囁いて、リサにキスをした。

そして、少し唇を話して呪文を唱えた。

「」

「」

二人で唱えた。大人をやめる呪文を唱えた。僕が知っているただ一つの魔法を囁いた。そのまま彼女と一緒に繰り返し繰り返し囁いた。儀式のように抱き合い、キスをして、囁いた。

ぼくは子供だから大人を知らない。大人の僕をしらないけど、今よりきつと鈍感で単細胞になっていると思う。子供の僕は誰にも似てない。けど大人のぼくは誰か

にいた人になっていると思う。差異を削って特異を捨てて大衆常識を着込んで摩擦を嫌って矛盾を気にしなくなっていく。

思いこんでいませんか。

子供が大人から生まれてきたのだと。

大人は子供よりたくさんものを知っているから偉いのだと。

いつか子供も自分達と同じところに行くのだと。

子供には無限の可能性と未来があるのだと。

親は子供を選べない、子供は親を選べないと。

自分が大人だと思っと思っていますか。

子供と大人の境界条件を教えてください。

大人は子供になることはないのですか。

家族が大切？

なんで嫌いなのに続けるの？

子供は誰のため？

誰のもの？

幸せが善ですか？

友達は財産ですか？財産ってなんですか？

世間が正しいのですか？正しくないといけないのですか？

子供は残酷ですか？残酷なのは悪い事ですか？

自然は大切なのですか？緑が減ってなぜダメなのですか？

昔がそんなに良かったですか？

閉じこもっていたらダメですか、働かないと自立出来ないのでか、どちらも他人に依存しているの。なぜ自立するのですか、なぜ外に出ないといけないのですか、他人に依存するのが悪いことですか、悪いことだとなぜ言うのですか。

誰かを妬んだり憎んだりしてはダメなの？

なんでこれが答えだと言うの？

僕は人間です。

僕には僕の生活と人生があります。

僕は考えることができます。

答えを押しつけないでください。

答えはいりません。

答えがなくても、僕は大丈夫です。

だって僕は魔法の呪文を知っているから。

答えを出さないから、呪文を知っています。

僕はそれをそっと唱えます。

繰り返し、繰り返し、唱えるのです。

呪文を唱えて子供になる。

愛なき……。

「リサ……もう、やめる?」

8

翌朝、コウタがキッチンに入っていくと、リサは鼻歌を歌いながら紅茶を入れていた。テーブルの上にはすでに朝食の準備が出来ていた。トーストとインスタントのスープ。真ん中にジャムのビンが置いてあった。いつもはコウタの好きな和食、ごはんとみそ汁とおかずと小鉢、というメニューなのだが、それにくればれば随分質素である。しかし昨夜のリサの事を考えコウタは黙って座った。

「おはよう、リサ」

なるべく明るい声で、コウタは言った。

「おはよう」

リサは振り返り弾むような声で返した。笑顔だった。リサは入れ立ての紅茶を持って、コウタに近づいていく。

「あのね、実はわたし、秘密にしていたことがあるの」

コウタは新聞を見ながら、なんだい、と言った。

リサはテーブルにコップを置いた。

「ユリカさんの事」

コウタは寒気がした。

コップを取ろうとした手が一瞬、止まった。

「ユリカさんが亡くなった日の事、覚えている?」

子供のような弾んだ声。

「あ、ああ。覚えてるよ」コウタは目を瞑った。

「ユリカは子供達と一緒に買い物に出て、その帰りに……事故で死んだんだ。転落事故だ。……駅のホームから落ちて、電車に轢かれて……。ユリカだけじゃない、息子も一緒に……。ぼくは家族を二人失ったんだ、その日に……」

コウタは目を開けて、天井を眺めてから、視線をリサに移した。

「違うわよ、コウタさん。ユリカさんが死んだのは事故じゃないわ」

「じ……事故じゃないってなんで」

「だって私知ってるの……」

リサはキッチンに戻り、トマトを切りながら続けた。

「ユリカさんはね、殺されたの」

子供のように弾む声、鼻歌を歌うような拍でリサは言う。

コウタは背筋が、寒くなった。

「事故じゃないわ、わたし見たのよ、ユリカさんが殺される所を……」

「リサ、それは本当か」

コウタは立ち上がった。

両手をテーブルにつけリサを見た。

そこで咳払いをした。

煙たい。

きつとキッチンで何かを焼いているのだろうと思った。

そんな事はどうでも良かった。

「ええ、本当よ。ユリカさんは突き落とされたの、そして、ユリカさんの手を握っていた子供も一緒に落ちて、死んだのよ」

小気味よいリズムでぎざまれる野菜。

煙が広がっていく。

「誰に殺されたか知りたい?」

リサは手を止めて、訊いた。

コウタは咳払いをした。

返答はしない。

コウタは一瞬、怖ろしく思った。

「二人はね、娘に殺されたの」

「……リサ……」

リサは包丁を持ったまま振り向き、酩酊した様な表情を浮かべ目を細めた。

「そうよ。私が、

私が、

殺ろしたんだよ……パパ」

(了)